
イレギュラー

大入り福袋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレギュラー

【Nコード】

N9018X

【作者名】

大入り福袋

【あらすじ】

誰にも負けず、誰でも守れる力を手にした主人公。

だが、肝心の守るべき人はもういない。

これは目的を失った主人公が新たに見つけた目的を達成する物語。

注意 主人公最強系です。

6話まで少し改稿しました。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

初っ端から説明回ですいません。

プロローグ

魂 それは命ある者の核であり、その者の精神と肉体の強さを表すものである。

また、魂は成長させることができる。

魂が大きくなれば精神と肉体の強さもそれに比例して上がる。当然、その逆も可能である。

その他に魂を成長させる方法は魔物を狩り、魔物のそれを吸収するか、神々から力を授けて貰うか
『転生』するか、
である。

魂を持つ者は2回の転生、つまり3回の人生を経験することができる。転生をすると死ぬ直前の魂を2倍にして、次の人生に受け継ぐことができる。

これが最も古く、最も強かった神が定めた転生と魂に関するルール、すなわち『この世の理』である。

そしてこの『この世の理』を己の強い、とても強い欲だけで無視する、まさにイレギュラーな男がいた。

その男は愛する人を守れず、死なせてしまったことから、その反動としてただひたすらに力を欲した。

結果、大量の時間はかかったが力は手に入った。

物凄い力が。

誰にも負けない力が。

誰でも守れる力が。

だが、男もわかっていた。

もう遅いのだと。

もう手遅れなのだと。

この物語はそんな、目的を鍛錬以外に失った男が見つけた、新たな目的の物語。

ブローグ（後書き）

時間があれば感想よろしくお願いします!!
あと誤字脱字報告もできたらお願いします。

1話 現状確認(前書き)

短くてすみません。

1話 現状確認

真っ暗な視界に光が差し込んできて、周りの景色が徐々に見えてくる。

最初に目に入ってきたのは、
(知らない天井だ)

まあ、『いつもの事』だが。

とりあえず現状確認だ。

まず、体を起こそうとしたが動かない。できるのは寝返りを打つことくらいか。

そしてなぜか泣いている。

その状態でばやけた視界を確認してみると、見えるのは天井と俺の寝ている場所を囲う柵らしきもの。

いつもどおり、赤ん坊のようだ。

と、目の前に金髪の優しそうな顔をした美人の女性が現れた。

察するにこの人が俺の母親だろう。

「は〜い、良い子だから泣かないでね〜」

俺を抱き上げながら言う。

そう言われてもこの体はいつも制御がきかない。悲しいわけではないが泣くのを止められない。

が、母親に抱きかかえられると自然と泣き声は治まった。

抱いてもらったおかげで周りがよく見える。窓の外を見ると庭と塀しか見えなかった。部屋の方は普通の子供部屋の2、3倍はあった。装飾も豪華だし、結構いいとこの家なのだろう。ありきたりの展開だがありがたい。

部屋には父親らしき精悍な顔つきをした青髪の中々いいガタイをした男が立っていた。

「ほぐら、父さんだぞ〜」

顔に似合わずあやすように声をかけてくる。

父親に抱かれると見た目だけでなくしっかりと、体が鍛えられているのがわかった。

たぶん結構強い。どっかの騎士隊の隊長を出来る位には。

さて、最後に此処は何の世界なのだろうか。

『魔法』か？

『闘気』か？

『能力』か？

『科学』か？

この家の建築様式からして『科学』はないだろう。

「この子は俺に似て、きっと物凄い闘気を使えるぞ」

ほう、此処は『闘気』の世界か。

「どうかしら、私の息子でもあるんだから、魔法だってすごいかもしれないわよ」

は？

「たしかに。お前の息子なら頭もいいだろうから、科学者にもなれるかもな」

なんだって？

「それよりも、この子にはどんな能力が備わっているのかしら？」

どうなってやがる！？

こんな世界ありえないぞ。

1話 現状確認（後書き）

主人公が驚いている理由は次回わかります。

時間があれば感想、アドバイスよろしくお願ひします！！

あと誤字脱字報告もできたらお願ひします。

2話 現状把握（前書き）

また説明回……すいません。

2話 現状把握

異世界というものがある。

数は全部で6つ。

4つの世界からなる下界と、魔界、天界だ。

魂を持つものが転生できるのは下界だけと決まっている。

4つの世界にはそれぞれ名前が付いていて、存在する特殊な『力』もそれぞれの世界に1つと決まっている。

魔法の「イルシオン」、闘気の「シユラハト」、能力の「アラギ」、科学の「エクシト」だ。

世界はこれに魔界、天界を足した6つ、6つだけなんだ。

なのに何なんだこの世界は!?

俺がこの世界に生まれてから6年が経った。

いつもの人生ならこの歳くらいで魔界へ鍛錬しに家出するのだが、今回の転生先は明らかにおかしい。

そこで俺は、この6年をかけてこの世界について調査してみた。調査といっても、ばれない様に親父の書斎の蔵書を読み漁ったりしただけだが。

結果、重要な4つの事が分かった。

1つ目、俺が生まれたこの家について。

これは本に頼るまでもなかった。そこに住んでいるんだから簡単だったな。

予想通りいいとこの家だったようだ。

それも軍（この世界は騎士団等では無かった）に優秀な兵士を輩出する名家だった。

親父本人は司令官クラスのお偉いさんで、おふくろはその副官のようだ。その他にも親父の兄弟たちも同じ軍に所属していて、皆親父クラスらしい。

そしてこの6年間でちよくちよく家訪ねてくる奴がいた。

何でも、親父たちの上司である男性の娘らしく、仕事の話に来るその男性によくついてきて「子供は子供で遊んでなさい」と無理やり遊ばされた。名前は東条紗枝。まあ、幼馴染ってやつになるかもな。幼馴染といえは、いとこに如月美香子という奴もいて此奴もそれにあたると思う。

次に2つ目、世界について。

どうやらこの世界は、6つの世界が混ざった感じのところらしい。

下界だけでなく魔界もだ。

全部の『力』が存在することにも驚いたのだが、俺が1番驚いたのはこの事だ。

何と魔界が混ざったせいで普通、「移動門」^{ゲート}を使用してしか魔界から現れられないはずの魔物が、この世界で繁殖しているのだから。

そのせいでこの世界の奴らの魂は他の世界の者たちの比べるとても大きい。せいで、というほど悪いことではないが。

次に文化。

どうもこの世界は科学の「エクシト」をベースにして出来ている。

まず、俺がいるのはヴォンターデ大陸という大陸の、中心にある独立中立国ベネットの首都エリザベートだ。

そして、この大陸にはベネットを入れて8つの国が存在する。ちなみにどの国も国王制だ。

それでなぜ、ここのベースが「エクシト」が分かった理由。

これは外に出ただけで分かった。なんせ、最新技術の病院やら学校やらがあるんだからな。

そして最後に、その学校についてだ。

その学校は首都エリザベードに存在する。

グロワール王立『護神騎士』学校。

俺はこの学園の情報を入手したとき、自分の頭を疑った。

『護神』だと？

護身ならまだしも、護神？

神を護るって？

どういうわけだ？

よくよく調べてみるとなんでも、王城に時々「神」が降臨して未来を予言するんだとか。そして90年くらい前にこんなお告げがあったそうさ。

「この先100年以内に大きな争いが起こる。それに備えて私達神を護る騎士、護神騎士を育成してほしい。その中でも優秀な者達には私達が、直々に力を授けよう」

……これが創立の由来だそうさ。

護神騎士学校……ねえ。

2話 現状把握（後書き）

もしかしたら気づいている人もいるかもしれませんが、ぶっちやけ「エクシト」は地球の東京みたいなところですよ、というか地球です。

時間があれば感想、アドバイスよろしく願います！！

あと誤字脱字報告もできたらお願いします。

10/31 学校名変更

12/04 ヒロイン名前変更追加

3話 入学準備（前書き）

4月のデパートのチラシみたいなサブタイになっちゃいました。待っていてくれた方お待たせいたしました。ではどうぞ。

3話 入学準備

「恭也、お前には失望したぞ。俺とあいつの息子だからどんな「力」を持つのかと期待していたのに。9歳にもなつて魔法も闘気も碌に扱えず、能力さえ発現しない。あまつさえ「力」の面では弟にも劣る」

俺は今、書齋で親父に説教をくらっている。

俺の本当の本名は「貫在恭也」^{かんざいきょうぜ}で、いつもの人生では本名と違う名前になるのだが今回は奇跡的に名前だけ当たった。この世界での家名は、

「いくら頭がよく体術に優れていても、この名家である『如月』家にいる以上それだけでは駄目だ」というわけだ。

さて、なぜ俺が親父に無能扱いされ、ボロクソ言われているのかというと、これもあの護神騎士学校に余計な監視をつけずに入学するためである。

俺はこの世界についてさらに詳しく調査するために、護神騎士学校に入学することをこの学校の情報を手に入れた瞬間に決めた。

そして、俺が入学するに当たって一番の障害となったのが先ほどの問題だ。

元来、大きな力にはそれを管理しようとする権力者の監視がつく。

何故なら、自分の障害となりえる者を権力者達は見逃さないからである。そしてそこに、名家の息子であることがプラスされればなおさらだ。

そこで俺は家から捨てられるという、選択肢を見出した。実力のある如月から見捨てられれば、その時点で監視の目は消える。そしてもし如月であることがばれても、「あの如月家から捨てられたんだから、碌な力を持っていないのだろう」という考えが生まれる。

つまり、俺は如月家と学校関係者に本当の実力知らなければいい、ただそれだけで監視は無くなる。

それでその選択肢を実行した結果が、さっきの言葉だ（最初の六年間は調査に夢中で碌に力を発揮しなかった。後の三年は体術だけで乗り切った）。

「明日の早朝、この家から出て行け。まあ、ある程度の金は出してやる。それを持ってとっとと消える。あと家名は変えていけよ」

「この言葉をどれだけ待ったことか。」

俺は内心、小躍りしながら罰が悪そうな表情を浮べた。

「……………では荷造りをしてきます。今までありがとございました」

「やけにあっさりしているな」

「ある程度の予想はしていましたから」

「……………そうか」

そうやって俺は親父に背を向け、書齋を出て行った……………満面の笑みを浮かべながら……………。

3話 入学準備（後書き）

やっとまともに会話した気がします。

時間があれば感想、アドバイスよろしく願いします！！

あと誤字脱字報告もできたらお願いします。

4話 入学（前書き）

題名のとおりです。
では、どうぞ。

4話 入学

「…………でかいな……」

王立グロワール護神騎士学校の前で次々と、紺を基調とした防刃防弾仕様の制服に身を包み、剣や杖、銃などを装備した少年少女たちが校門をくぐる中、黒髪黒目で鋭い目つきのもとても整った顔立ちをした少年が軽く呆けたような声を出した。

腰には鞘が真っ黒な刀を差し、両足のホルスターにはそれぞれ右に黒と左に銀のゴツいハンドガンが、収まっている。

その少年はかなり目立っていた。

原因は唯一つ。

それは少年の容姿である。正確にはその髪と目の色が。

黒髪黒目はこの国ではかなり珍しい。

そのせいで、少年はかなりの注目を受けていた。

そこかしこで話し声が聞こえてくる。

「ねえ…………あの人の髪と目」

「黒色ね、珍しい……」

「てゆうか、それよりもあの人…すごく」

「……………かつこいい……………／／／／／」

「……………くそ…が……………」

「……………イケメンは死ねえー！！！！……………」

主に顔立ちについてで髪と目にはあまり触れていないが。

と、少年は自らの腰に差した刀が軽く振動したような気がした。そして、それと同時に透き通るような少女の声が少年の「心」は確かに捉えた。

（注目を受けてますよ、マスター）

（だな。だけどアレだろ、俺の髪と目が珍しいだけだろ。でもまあ、それにしては受ける注目が多い気がしないでもないが）

（……………はあ。相変わらずマスターは鈍いですね）

（うん？）

（もういいですっ。けど、確かに大きいですね）

（だろ？）

少年は自分の相棒と「念話」しながらも、驚いていた。

それもその筈である。このグロワール王立護神騎士学校は初め見

る者が腰を抜かすほど大きくて広い。

まず校舎が小さめの城くらいの大きさを誇っている（デザインは現代の校舎）。そして何よりグラウンドが半端じゃない。校舎の4分の1くらい、練習場が三つに、同じくらいの大きさのアリーナ（稼動形ドーム付なので雨天時使用可能）が2つ、ついでに校舎の半分くらいの寮と、小さい村くらいの敷地面積がある。

こんなに広いと移動が大変ではないか、という声もあるのだがそれは要所要所に設置されている「移動門」^{ゲート}同士を接続することで何とかしているようだ。

（さすが、神を護ろうとしているだけあるな）

（ですね）

少年は素直に感心して校門をくぐった。

S I D E 貫在恭也

俺は、家を追い出されてから国に外れにある「恐れ森」という所で野宿をして暮らしていたんだが（食料は魔物ども。そしてこの喋る刀（喋るだけじゃないですよ）………喋るだけではない刀、「月夜」とも出会った、というか創った場所でもある）、2週間くらいたったところに普通に寝ていたところを迷子と間違われて、魔物の討伐に来ていた女性に保護された。

そして、その人の養子となり他にその女性に拾われたという、3人の義兄妹達今まで過ごしていた。（その人の苗字は奇跡的に貫在

だった。本当に不思議だ)。

で、その女性と1人の義妹に一ヶ月前くらいに、此処へ入学したいことを伝え、拝み倒してOKしてもらった。

だが、そんな昔話はどうでもいい。今は歡喜すべきときだ。なぜなら……………。

「……………ですから、君たちはここで心して学業や訓練に励んでください」

「これで校長先生の話が終わります。礼」

三十分に渡る校長の話が終わったからだ。

あのバーコード頭め！ずっと立たされているこっちの身にもなれっつてんだ。

……………何がともあれ、後は壁に張り出されているクラス表を確認して教室に向かい、クラスメイトと顔合わせすれば今日は寮に帰れる。

「これで入学式を終わります。1年生は順番に壁に向かって歩き出してください。あ、今並んでいる列ごとに、ですよ」

俺は長話で削られた精神力を振り絞って足を踏み出した。

クラス表の辺りはかなり混雑していたが、かろうじて自分のクラスを確認できた。

この学校は筆記試験と実技試験の成績でクラスを決める。

進級してからは、全部で五年ある学校生活の中で進級前にやる試験で。

「魔法」と「闘気」は碌に扱えず、「能力」すら発現していないという設定の俺は当然ながら最下位のFクラス。

試験の結果が返ってきたときは結構焦った。自分で落第ギリギリを狙ったんだがギリギリ過ぎて、危うく本当に落第するところだった。

ついでで最高位のSクラスの表を確認してみたんだが、ヤバイ名前を見つけてしまった。

東条紗枝と如月美香子、北森綾香だ。

おそらくだが三人ともかなりの実力者だ。

紗枝と美香子　美香子は親父の弟の娘、つまり従兄弟　は言わずもがな。小さい頃から一緒に遊んでいた俺は二人の実力をよく把握している。

そして北森綾香。こいつは学年主席だ。なんと入学試験では筆記、実技ともに満点。ちなみに面識は無い。だが北森ってのは東条に並ぶ四大將軍家の一つだ。警戒はすべきだろう。

あと最初に言った二人は俺が「如月」であることを知っているから危険度アップだ。てゆうかこいつらが同い年なの忘れてたな、完全に。

まあFクラスの俺が接触することも無いだろう。

そう思って俺は自分の教室に向かった。

4話 入学（後書き）

時間があれば感想、アドバイスよろしくお願ひします!!
あと誤字脱字報告もできたらお願ひします。

5話 再確認(前書き)

お待たせしました。

すつごく下手な説明会です。あんまり物語は進みませんでした。すいません。

5話 再確認

S I D E 〱 貫在恭也

この世界に存在する「力」について説明しておこう。

はじめに魔法。これが一番この世界で使われている「力」だ。全部で火、水、風、土、氷、雷、聖、闇と八つの属性に分かれているが、どの属性にも当てはまらない無属性魔法も存在する。一人の間が使える属性はせいぜい三つほどで、四つ以上の属性を扱えるものは中々いない。

ほとんどの魔法は六つの系統に分かれており、それぞれ攻撃系統、防御系統、強化系統、治癒系統、精神系統、転移系統だ（「系統」の部分を「魔法」と言う時もある）。

一つの属性の攻撃、防御系統を使いこなせるようになって、初めて「〃属性の魔法が使える」と言う事が出来る。属性の全系統が使えるようになる、「〃属性をマスターした」とも言える様になる。

発動方法についてだが基本は呪文の詠唱で、自分の保有している魔力が、空气中を漂う自然魔力を取り入れて、それを燃料として発動する。自然魔力は自己魔力と違って、制御が難しい。魔術師は基本、体内の魔力を使うが、優秀な者はなるべく空气中の自然魔力を使用し、いざという時まで自分の自己魔力を温存しておく。当然のことだ。何故なら自己魔力は有限で自然魔力は無限だからだ。

そもそも魔力の源は、この後説明する「魂の力^{アルマ}」と呼ばれる魂だ。

睡眠中に自動的にアルマが魔力に変換され、その者の魔力を満たす。それによって自己魔力が生成される。自己魔力を使用することは、ある意味命を消費しているから、使えるなら無限に存在する自然魔力（使いすぎればさすがに大気中の魔力は薄くなり、取り入れることはしばらく出来ないが）を、使うに決まっている。

ただ、さっきも言ったように自然魔力は制御が難しい。何故なら、魔力の制御、および魔法の制御は精神力が命だ。自然魔力と違い、自己魔力の大元は自分の命 魂だ。自然魔力に比べ比較的容易に操れる。だが自然魔力はそもそも正体不明で実態がよくわかっていない。そんなものを操ることが難しくないわけがない、ということだ。

さて、先ほどの続きだが呪文が必ずしも必用と言う訳ではない。

魔法は体内の魔力を制御し、使う魔法を強く「イメージ」して形にし、対外に放出する、という術^{すべ}だ。

呪文はあくまでも、その魔法を発動させるために、必要なイメージを作るための鍵でしかない。つまり、詠唱破棄というものも可能ということだ。だが、この技術を会得するには相当な努力と才能がいる。しかも魔法の難易度が上がるにつれて難しくなるというおまけ付き。だからこんな技術を修めようという者は少なく、普通に自分の使える魔法を増やそうとするものの方が多い。何故なら、できるかどうかもわからないものに時間を掛けるより、圧倒的に効率がいいからだ。

次に闘気についてだが、こいつの使用方法は主に身体強化だ。戦闘意欲を鍵に意識的にアルマ 魂を闘気に変換して、それを纏ることが可能だ。

命を懸けているだけあって強化系統の魔法のおよそ二、三倍の強化をする事が出来る。

他に闘気で出来ることといったら、対外に放出して「気弾」として飛ばすか、障壁を作ることぐらいか。

最後に能力。この「力」は大体三歳〜五歳の間に発現する。発現数は人それぞれで一〜三つ。四以上は滅多に居ない。

精神干渉系や、操作系なら初級魔法使用時の三分の一程度の魔力を、身体強化系なら闘気通常使用時の五分の一程度の魂を持っていられる。

不思議なことに、この力は魔法や闘気の使えない（精神力が足りなかったり、アルマの闘気への変換が苦手な者の事）者でも例外的に使える。本当に不思議なことに。

しかもこの「力」はほぼ全員が発現するので、落ちこぼれの人間（こつという表現は好きじゃないが）にとっては救いと言えるだろう。

そして、上記二つの「力」違うところは使用したのを悟られないというものだ。魔法と闘気はある程度修めれば、使用したときの気配を悟れるのに対して、能力にはそのデメリットが一切無い。つまり、使った気配が悟られず、暗殺にもってこいの「力」ということだ。この「力」がいちばん強いのではないか、という声もあるのだがそうでもない。使用者自身の気配が消えている訳じゃ、無いからだ。

最後に「魂の力」^{アルマ}についての説明。

気配の元は「魂の力^{アルマ}」というものだ。「魂の力^{アルマ}」は「魂の器」に納まっており（器は睡眠中に満たされており、魔力変換されていて、常に満たされている状態）、そいつの「力」が強くなると、それに比例して「魂の器」が大きくなり、ついでに身体能力も上がる。つまり、相手のアルマが探れるようになると、そいつの強さも漠然とだが、分かるようになるということだ。まあ、それなりの実力を持つものは気配を消すこともできるのだが。

（誰に向かって言ってるんですか？マスター）

（さあ？誰だろうな）

（……？）

ようやく一年生の教室がある三階にたどり着いた。

いや〜アリーナから結構遠かったな。いくら「移動門^{ゲート}」使ってもやっぱり広いな此処は。

そしてはたと、ある事に気づき足を止める。

俺がここへ来た目的は何だ？

この世界と、そのうち来る戦争とやらについて、調べる事だ。

この学校の四階には、相当な蔵書を誇る図書館が存在するらしいな。それこそ読みきるのに一年以上、かかる程の。

俺がまじめに学校生活を送る必要性は？

………ないな。

(ええっ!?)

俺は踵を返し図書館のある四階を目指す。が、またすぐに足を止める。

さすがに授業をサボると目立つよな。

(そうですよ!)

……よし。

久しぶりに「力」を使うことを決める。

(えええっ!?)

覚悟を決めると俺は、周りにこちらに注目している者が、誰もいないのを周囲のアルマを探って確認したあとに、能力『認識阻害』を発動する。これは読んで字のごとくの効果で、対象を認識出来なくするものだ。

今回の対象は俺自身と今から発動する魔法。ちなみに今、俺はあの意味透明人間だ。

その状態で無属性魔法『幻像投影』を無詠唱で発動する。この魔法も名前からわかるように、自分の望んだ幻を出現させるものだ。

俺が出現させたのは俺の分身。

（お上手いですね）

（ありがとう）

月夜の柄部分を撫でてあげる。

（はうっ！？……いえいえ／＼／）

（うん？）

この分身に、幻という事がばれない様に二つの対策を施す。

一つ目は、俺の一割くらいのアルマを分け与えること。ただしこの時、アルマの一部に『認識阻害』を掛け、気配を探られても一般人レベルに見えるように偽装しておく。この工程を施すことにより、こいつは物質に触れられるようになり、気配では幻ということに気づかれないようになる。だが一つ欠点があって、向こうから触れてきた場合簡単にすり抜けてしまうというものだ。まあでも、俺に好き好んで触れてくる奴なんて、居ないから問題ないだろう。

（それはどうですかね）

（どつという意味だ？）

（鈍感なマスターには分かりませんよ）

そして二つ目。俺は能力『思考分担』を発動する。この能力は複数の事を同時に考えることができる能力だ。この場合は二つだが。

一つの思考は幻の脳に、直結させる。もう一つの思考はもちろん、本体である俺。これでこの幻は、人形ではなく本当の意味での俺の「分身」になった。

最後に装備を渡しとくか。俺は「月夜が」良いから銃だけ渡しとこ。

(はうく／＼／＼)

作業を終えると『認識阻害』を行使したまま、俺は図書室のある四階へ歩き出した。

自分とは反対方向に進む、足音を聞きながら……………。

5話 再確認(後書き)

時間があれば感想、アドバイスよろしくお願ひします!!
あと誤字脱字報告もできたらお願ひします。

6話 一年F組くその1く(前書き)

お待たせしました。
ではどうぞ。

6話 一年F組のその1

此处、一年F組の教室はとても居心地の悪い雰囲気の流れていた。

原因は教室後方にある空席を睨む、ナイスバディをした赤髪の美人教師にある。燃えるような赤髪が腰まで伸び、毛先に少しカールがかかっている。目は切れ長できれいな肌を持っている。

今は入学式後のクラスの顔合わせの意味を持つ、ホームルームの時間。正確にはその三十分後。このクラスではまだホームルームが始まっていなかった。一人の遅刻者のせいで。どうやら美人教師は何が何でも全員揃うまではHRを、始めないつもりらしい。

美人教師の出す不機嫌オーラの居心地の悪さに、クラスの誰もが冗談事ではなく、悲鳴を上げようとしていたそのとき教室後方の扉が開かれた。

入ってきたのは黒髪黒目の鋭い目つきをし、整った顔を持つにもかかわらず、どこか眠そうな雰囲気と薄い存在感を纏った少年だった。この少年の登場に生徒のほとんどが、ぶつけるべき怒りの感情を忘れ、少年に注目する。

「……………かつこいい……………／／／（美人教師を含む）」

「……………くつそ……………かつこいい……………な……………」

女子は（美人教師を含む）頬を赤く染め、男子は悔しそうに呟く。

少年、もとい恭也はそんなことは聞こえていないようで、欠伸をしながら教室に入ってくる。

「おい！！貴さ」そ、その男子生徒！！三十分の遅刻だぞ……」
「……くっ……後で覚えておけよ……」

だが一部、というより一人の男子生徒は違ったようだ。この男子生徒は名家「盾元」の息子で、本来Sクラスに入れる实力を持つのだが、首都から遠出しすぎたせいで、試験に間に合わず、泣く泣くFクラスに入った不幸な少年だ。

自分のFクラス入りと「盾元」の次男を三十分も待たせるとは何事か、と並々ならぬ怒り少年は持っていた。そしてそれをぶつけ様とした矢先に、元に戻った美人教師に言葉を遮られる少年。金髪のプライドが高そうなイケメンフェイスが屈辱に歪む。

「ほ、ホームルームが終わったら、他の者たちは今日はもう終わるだが、お、お前は後で職員室に来るように。に、二度と遅刻などしないように、みっちり説教してやる。……うふふふ。」

「は？」

「……………えー！？」「……………」

少しうれしそうにしながら頬を赤くし、そう美人教師は宣言する。

不思議そうな顔をする恭也。

とても不満そうな顔で叫びだす女子たち。

「俺は三十分も遅れたんですか？」

「ああ、そうだが？」

「そうですね。それはすいませんでした」

謝罪した後恭也は、何か思案しているような顔で空席に向かって早足で歩き席に着く。

(そんなに時間を掛けていたか。考え事していると周りが見えなくなる癖は、何とかしたほうが良いな)

恭也の席は窓側の一番後ろだった。

ここならのんびり眠れそうだな。

のんきにそんなことを思っていると、隣から驚いたような声が聞こえてきた。

「あ、貴方は……」

茶色の髪を腰まで伸ばし、少し幼い顔立ちをした、それでいて豊かな胸を持つ美しい少女だった。

「恭也さん……ですよね？」

「ん？」

恭也は首をかしげる。

この顔どこかで……。

「覚えていませんか？……あのとき恐れ森で……」

不安そうに少女が問いかける。

（恐れ森……？そういえば六日目にナーゲルベアーから誰かを助けた気が……。確か名前は……）

「真唯？」

「はい！藤達真唯ふじたちまこですつ。あの時は本当に」

「そのことは後で」

真唯の声を遮り耳元に口を近づけ、言う。

「ひゃ、ひゃいー！」

顔を真っ赤にしながら真唯は前を向く。

恭也は訳が分からない、という風になりながらも前を向く。

「さて、ようやく全員揃ったところでホームルームを始める。まずは自己紹介から。私は赤崎好音あかさきよしねクラスの担任だ。昨年までは、この生徒だった。教師としては新人だが護神騎士としては五年も先輩だ。その経験を生かして頑張っていると思う。この学校には二年生から専門科せんもんかごとの授業になるんだが、私は前衛科の担当だよ。よろしく」

好音はそこで笑顔を見せる。

男子生徒のほとんどが赤くなった。

それは当たり前のことだった。好音は怒ってさえいなければとびきりの美人なのだから。

「それじゃ、皆にも自己紹介してもらおう」

いちばん前の生徒が席を立つ。

そこで机に突っ伏していた恭也の意識は眠りの国へとんで行った。

6話 一年F組のその1 (後書き)

時間があれば感想、アドバイスをよろしくお願いします!!
あと誤字脱字報告もできたらお願いします。

一年F組のその2 (前書き)

遅くなつてごめんなさい！

一年F組 その2

SIDE 藤達真唯

私が彼に出会ったのは9歳の頃。今と同じ春の季節。小遣い稼ぎに薬草を「恐れの森」へ取りに行ったとき、道に迷った私は

「ここ…どの辺りかな……。家に…帰れるかな…。お母さんに…会えるかな…ぐす……」

道に迷ってしまったそもそもの原因は、魔物に出会ってしまった事でした。

この森は「恐れの森」という名前だけあって魔物のランクが物凄く高いのです。

魔物のランクは全部でF、E、D、C、B、A、S、SS、SSS、U(Unknown 測定不能の頭文字)ランクまであって「恐れの森」では最大でSランクの魔物が生息しています。でも、森の外周部には全くと言って良いほど出現しないので、安心して薬草を採取していたのですが……恐らく群れから逸れ、道に迷っていたのでしょうか。きよろきよろと、周りを窺いながら2メートル半はあろうかという巨体、そして1メートル程の大きな爪を持った熊が森の奥から出てきました。

この魔物については本で読んだことがあります。

名前はナーゲルベアー。獰猛な性格で知能が高く五匹程度の群れを作って活動し、獲物を罾に掛け自身の大きな爪で仕留め、肉を貪

るBランクの魔物です。

Bランクというのは熟練の一流冒険者七、八人で、ようやく勝てるという強さを表しているのです。

そんな魔物に多少「力」が使えるとはいえ、九歳の少女である私が対抗できる訳がありません。逃げる方が良いに決まっています。そう決意した私は脇目も振らずに駆け出しました。

幸いなことに発見される前に逃げられた様なのですが……道に迷ってしまつては、家に帰れないことに変わりありません。

とりあえず私は一直線に歩いてみました。

「恐れ森」は円形に広がっているのです、まっすぐに歩けば抜けられるのでは？と、思ったからです。でも……その考えは間違っていました。

「森の外周部には全くと言って良いほど出現しない」という事は、中心部には魔物が大量に出る、という事です。

九歳の私はその事実気づいていませんでした。

しばらく歩いていると開けた場所に出ました。「開けた場所」といつても森を出られたわけではなく、周りは木々で囲まれています。

歩きつかれたので少し休憩しようかな、と思った私は近くに腰を下ろして目を閉じ　その時初めて気づきました。

周囲から聞こえる荒々しい息遣いに。

食欲に染まった目で、こちらを見てくる視線に。

「う、うそ……」

私は恐怖で腰が抜けてしまって、その場から動けなくなりました。ただ、ただ迫りくる「死」にガタガタと、震えることしかできません。

やがて四匹の獯猛な熊たちが姿を現しました。

そしてもうがまんできない、とばかりに一匹が私に向かって駆け出して来ます。

「グガ　　！！」

死を覚悟してなお私は悲鳴を上げてしまいました。

「イヤ　　ッ！！！！」

ズガンッ！

そのとき、一発の銃声が聞こえてきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9018x/>

イレギュラー

2011年12月11日21時47分発行